かも市史だより

平成21年10月
No.20

◆編集発行　加茂市幸町2丁目3番5号　加茂市教育委員会内市史編さん室 ☎0256(52)0080 内線480

長谷 五社宮の社殿群

▲五社宮全景

▲本殿の覆屋

▲本殿の妻飾

古来、その地域の産土神と呼ばれる庶民の社殿は一棟の中に、祭神を祀る本殿、神官が祭事を行う弊殿、そして参拝空間である拝殿が納まっている形が多かったようです。ところが江戸時代も中期を過ぎますとこの社殿に機能分化の考え方があらわれ各々の機能が分棟化してきます。私達が一般的にみる社殿はこの形で、拝殿と弊殿、そして本殿と各々の空間が建物によって区分されています。

しかし、ある日突然その様な形が現われたわけではありません。たとえば上土倉の十二神社は当初、現在の拝殿の中に社殿の機能が全て納まっておりました。ところが安政四年（一八五七）に新たに本殿がその奥に建立されました。現拝殿には以前の形態を示す明らかな痕跡が残されています。

ところが、長谷の五社宮の社殿群は宝暦から安永期（一七五一～一七八〇）頃の建立と考えられますが、すでに機能分化をした姿で、大改修の跡もなく今日まで、その姿をよく伝えております。板葺の本殿と幣殿は、金属板で覆われていますが、茅葺の拝殿と本殿の覆屋、そしてそれを支える構造体等、一度ご覧になって下さい。

（文化財部会　山崎完一）

加茂市内 出土の古銭

しばらく前、自宅の庭に埋めておいた現金三億円が盗まれたというニュースを聞いて、今どき大金を地中に埋めておく人があるのかと驚きました。しかし、金融機関の整わない昔は、地中にお金を埋めることはよくやったらしいのです。

宮寄上の例

花咲か爺さんの愛犬ポチが「ここ掘れ、ワンワン」と鳴いて、小判を掘り当てたように、偶然の機会に地中から古銭が発見されたという話が、加茂市内にもいくつかあります。

今から約二四〇年前の明和七年（一七七〇）二月、嶽山寺の家来の万四郎と宮寄上村の徳之助の二男の四郎兵衛が、嶽山城跡といわれる熊野権現山の相撲場清水の上、山の平という所で、深さ一尺五寸（四五センチメートル）の地点から口の直径八寸（二四センチメートル）、底四寸（一二センチメートル）ほどの瓶を掘り出しました。蓋は朽ち果て、中に土が入り込んでいましたが、それを取り除いてみると、青く錆びた古銭がぎっしり詰まり、量ってみたところ、約一六貫匁（六〇キログラム）あったといいます。

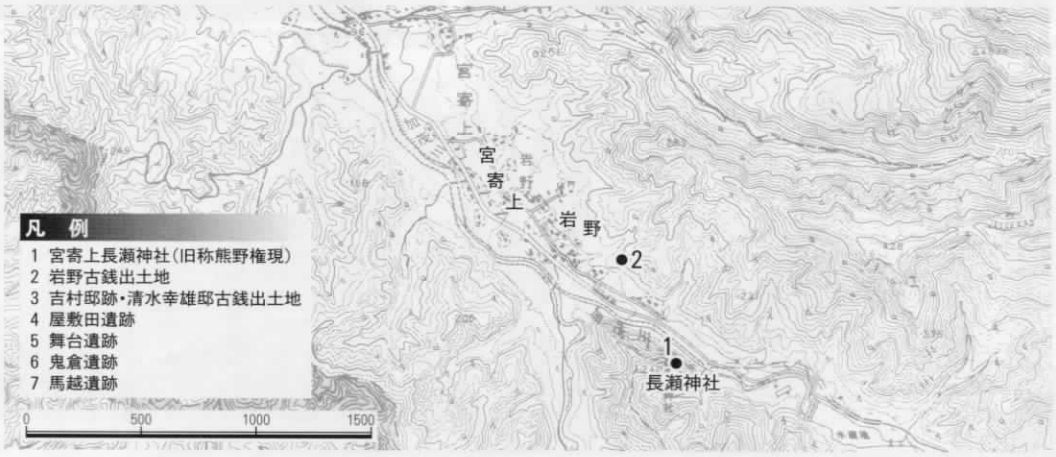
これと似た話は明治二年（一八六九）にもあり、また、昭和四十七年（一九七二）にも嶽山城跡からほど遠からぬ宮寄上の岩野集落の裏手の山林で、小柳利之氏が杉の植林中、偶然に地下二〇センチメートルくらいの所で、粘土で包むようにして埋納してあった木箱に入った約一八キログラムの古銭を発掘しました。このうちの最新銭は、中国の明銭の宣徳通宝（初鋳は一四三三年）でした。

岡ノ町の例

岡ノ町の旧吉村邸（現阿部精麦株式会社管理駐車場）から、昭和二十八年（一九五三）十一月、庭木の移植作業中、梅の木の根元から須恵器の瓶に入った二一六枚の古銭が発見されました。このうち最新銭は、中国の南宋の嘉熙通宝で、その初鋳は一二三七年です。

昭和五十一年（一九七六）九月に、この旧吉村邸の南方一五～二〇メートルの清水幸雄邸の改修工事中に、地下七〇センチメートルの箇所より、須恵器の瓶に入った古銭が発見されました。（八百枝茂「加茂市岡の町（清水邸）の古銭出土について（第一報）（第二報）」『加茂郷土誌』八号・十一号）。枚数は一万三〇〇〇枚程です。最新銭は元の至大通宝で、その初鋳は一三一〇年です。

この旧吉村邸と清水邸は近接していて、故八百枝氏は、埋蔵古銭のうちの最新銭は、元の銭種であり、埋蔵容器の須恵器の「瓶の形態・模様・埋蔵方法等も近似している」とし、「いずれにしても十四世紀の後半頃、同一人物がなんらかの目的で埋蔵したものと推定される」としています（同上）。



◀ 吉村邸出土の古銭

◀ 古銭が入っていた須恵器瓶

●上条・下条の例

平成九年（一九九七）、下条字下興野の鬼倉遺跡の発掘調査で、いずれも八世紀にわが国で鋳造された和銅開珎一枚と神功開宝二枚が出土しました。

鬼倉遺跡の下条川の川向いにある馬越遺跡からは、平成十年の確認調査の際に、中国の北宋の皇宋通宝（初鋳一〇三八年）が発見され、その後平成十七年に行われた発掘調査で、北宋の元祐通宝（初鋳一〇八六年）が出土しました。

上条の屋敷田遺跡の平成七年の確認調査で、北宋の皇宋通宝が一枚発見され、この屋敷田遺跡に近接する舞台遺跡の平成六年の発掘調査で、中国の唐銭・北宋銭が合わせて六枚発見されています。

●どうして地中に埋納？

では、どうして地中に銭が埋納されたのでしょう。上条の舞台遺跡で六枚の中国銭が出土した近くで呪（まじな）いの文句を記した木の札が出土していますので、これらの銭も呪いや祭りに関係したのかもしれません。

下条も鬼倉遺跡から出土した古銭三枚のうち二枚は、土坑から重なった状態で出土しており、伊藤秀和氏は「祭祀に関係したものとみられる」と記しています（『鬼倉遺跡発掘調査報告書』）。こうした呪いや祭りに関係するとみられる銭は、奉賽銭（ほうさいせん）と呼ばれています。

次に考えられるのは、万一に備えて埋納するということです。それは戦乱や不慮の災害に対する危険回避のためであったことでしょう。

岡ノ町の旧吉村邸と清水邸に大量に埋蔵された銭貨は、埋納されたと考えられる時期が、南北朝の内乱期であり、正平十年（一三五五）には、加茂附近でも戦闘がありましたから、埋納の目的が、戦乱を避けるためとも考えられます。

宮寄上の岩野から出土した古銭が埋納された時期について、高橋雅弘氏は、出土した銭のうち最も新しい銭が中国の明銭の宣徳通宝（初鋳一四三三年）であることから「十五世紀の終末から十六世紀の前半という実年代を想定することができる」と記しています（「加茂市内及びその周辺の中世城館跡（その一）」『加茂郷土誌』十九号）。

この時期は、越後の戦国時代の幕明けといわれる永正の乱に続く戦乱が各地で展開された時期でもあり、戦乱を避けるためだったと考えてよいようです。

▲ 清水邸出土の至大通宝

▲ 発見した清水夫妻と古銭・瓶

では、どうして堀り返されずに、そのままになっていたのでしょう。埋納した本人及びその一族の人たちが戦乱に巻き込まれて死亡してしまったということも考えられますが、柏崎市の東原町遺跡で、壺に入った一万枚以上の古銭の発見を報じる平成十五年（二〇〇三）六月十七日の朝日新聞には、「集落を守るためのまじないで埋められた」との可能性が記されています。これは新しい見解です。この場合は一種の奉賽銭ということになります。従って、掘り返してはいけないので、そのまま地中に残ったことになります。

（考古・古代・中世部会 金子 達）

▲ 鬼倉遺跡出土古銭（神功開宝と和同開珎）
（写真の遺物は全て加茂市民俗資料館所蔵）

トコロに日本文化の基層をみる

民俗儀礼にみられる餅に象徴される稲の文化に対して、「稲作以前」から栽培された里芋や自然界から採集されるヤマノイモについての研究が行われてきました。いわゆる「照葉樹林文化」を支える作物として里芋が注目されてきました。里芋は日本の西から東に伝わり、栽培されてきたものです。したがって日本の西の地域には里芋の儀礼も多くみられます。一方で日本全国に自生しているトコロというイモがあります。神饌や供物として全国的に用いられていますが、特に日本の東の地域にはトコロを供える儀礼が根強く残っています。加茂市や五泉市・阿賀町から会津にかけての地域もその一つです。

トコロの文献と史跡

トコロは野老の漢字があてられ、オニドコロともいい、山野に自生するヤマノイモ科のつる性の多年草です。自然採取が容易なことから日常の食物、非常時の救荒食物、ハレの神饌や供物、毒物、薬材として全国的に利用されてきました。

『古事記』中巻で倭建命の崩御のとき歌われ、御葬歌のひとつとなった「なづきの田の　稲幹に　稲幹に　匍ひ廻ろふ　野老葛」が文献上の早い例となります。俳諧・俳句の歳時記で次の例を見出すことができます。「山寺のかなしさつげよ薩摩ほり」（松尾芭蕉）とあり、「野老掘る」は秋の季語です。海の海老の代わりにトコロのひげを長寿の老人にみたてて新年の飾りとして「郷愁や野老の味のほろ苦き」（潮原みつる）もあり、「野老」は新年の季語となります。

東京都あきる野市五日市の光厳寺境内に天保の大飢饉時（一八三三～一八三九）の「ところ芋の碑」が建っています。また江戸時代の農学者大蔵永常は、安政六年（一八五九）刊行の『八公益国産考』で、飢饉の備えになると、トコロを説いています。

トコロ採り

ヤマノイモは宮寄上の名産ですが、山の幸が豊かであるほどその採集には厳しい制限がつけられました。十月の末の一週間くらいを「山の口が開く」といって、この間に限りヤマノイモを採ることができます。期日はムラで決めるヤマビラキで始まり、ヤマドメで終わりました。採ったものは土産物としたり、秋に蕎麦を作る時につなぎとして入れました。ヤマノイモは、掘り終わるとシナクビ（イモの上部）はもいで、またそこから芽がでるようにと埋めておく習わしでした。採集をしつつ資源も枯渇させずに循環を図ることが、個人の利よりもムラの決まりとして優先され、守られてきたのです。

現代ではトコロはヤマノイモほど価値を認められていないのではないでしょうか。同じヤマノイモ科のイモで、それぞれの葉はよく似ていますが、よくみると違いがあります。宮寄上ではヤマノイモの葉は細長いがトコロの葉は丸く、つるの巻き方が違うといいます。黒水西区ではヤマノイモの葉は牛の顔に似ており、十月十五日を過ぎるとつるが切れるといいます。

彼岸のお供えとして

春に雪が消えると山に行き、トコロのつるをみつけて採りました。茹でて食べると苦いが、その苦味を口に含むと甘く感じ、胃の薬になるといいました。秋になると三方向に花が咲きますが、いつまで経ってもつるは残ります。トコロは秋が時期ですが、つるは「ホトケサマがトコロのひげにミヤゲダンゴをぶって帰らっしゃる」といって、終戦前までは春の彼岸に掘ってホトケサマに供えていました。黒水西区ではつるは彼岸のタチビに昼飯のミヤゲダンゴの背負い紐にするといい、後で家人が食べます。毒流し漁という魚捕法があり、トコロの根や蔓を潰したものを流すと魚が捕れる

▲ 加茂市でトコロを売る

▶ 五泉市でトコロを売る（客の手の右が栽培物、左が自然物）

と聞いたことがあるともいいます。秋の彼岸には、ホトケサマにサナヅラを上げ、サナヅラのつるでホトケサマがミヤゲダンゴを付けて（手に提げて）ゆくともいいました。サナヅラはヤマブドウの小さなものでスッコイ（酸っぱい）味がします。ヤマブドウがオクヤマ（奥山）にあるのに対し、サナヅラはムラの内にあります。終戦前まで慣習として供えていました。

黒水東区の坂上チジさんは加茂の四・九の市で春彼岸用のトコロを売ります（四ページ）。てまひまかけるのに割が合わないが、毎年仏壇に供えるために求めに来る人がいるので市に持って行きます。家を六時前に出て十一時まで出ています。また五泉の市でも自然物と栽培物の二種類を生で売っていました。

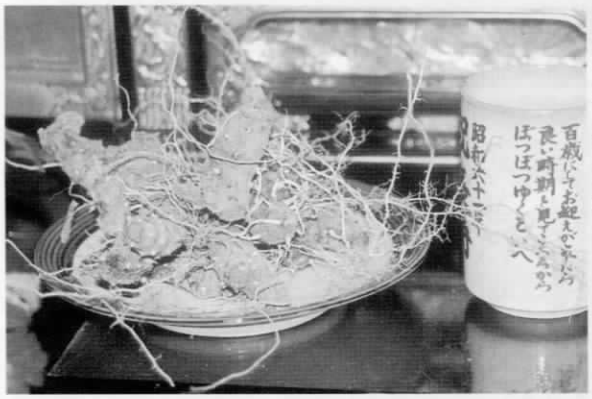
▲ 春の彼岸 仏壇に供えられたトコロ（坂上チジさん宅）

市史編さん室が平成十三年に実施した「民俗・習慣・言い伝えに関するアンケート」のなかに「年中行事のなかで、彼岸にトコロ（ヤマイモ科の植物）を仏壇に供えたことがありましたか」という設問があります。「イ・ある　ロ・供えたことはないが聞いたことはある　ハ・トコロは知っているが全く供えた話は聞かない　ニ・トコロも知らない　ホ・その他（　）」から選択して回答するようになっています。アンケート提出が三五七人で、うち二九四人から回答がありました。複数回答も含め概観しますと、七谷地区はイが多く、加茂・上条地区で多いのはハ・ニでした。また下条地区はイ～ニが混在して、須田地区ではニが多くハが続きます。トコロを神饌・供物に用いる地域は、東北日本に卓越していますが、加茂の事例は、身近な採集物が儀礼を支えてきたことを示しています。

団子以前の神饌・供物

正月・盆・彼岸など、おもに祖霊をまつる儀礼においてトコロはなくてはならないものでした。

トコロを元旦の儀礼に使う事例をみますと、糸魚川市小見の白山神社の元旦祭では、参拝者にゆでたトコロ二片をのせたオコワ（モチ米）のゴク（御供）を配ります。村上市雷（いかずち）ではオテカケボンのなかにトコロを加え、トコロは餅を食べた後の消化に良いといいます。



▲ トコロ（上の拡大）

仙台市の盆では、旧暦の七月十三日に仏壇の前の棚にキュウリ・ナスなどを吊るしますが、必ずトコロがなければならず、ホトケノヒゲといい、仏さまはトコロのヒゲを伝わって仏壇に上がるといわれています。

五泉市猿和田では、秋の彼岸の入りにオハギ（ウルチ米）を供え、春彼岸のトコロの替わりとして、里芋を一株供えますが、これは里芋の東漸によってトコロが里芋に変容する事例としてとらえることができます。正月のハレの供物に里芋のみを用いる「餅なし正月」から、里芋と餅（モチ米）の並存を経て「餅正月」に変遷したと民俗学者の坪井洋文はいいます。

これらの事例をみますと、餅・団子と並存してトコロが食されていることがわかります。むしろトコロに価値が認められているのです。トコロ・里芋・餅（稲）の重層性が認められ、餅・団子を供える以前の、神饌・供物の形のより古い文化の姿をみることができます。『古事記』の歌謡はヤマト王権＜稲幹＞に服属する山の民＜野老葛＞を象徴するものと解釈できるのではないでしょうか。

（民俗部会　鈴木秋彦）

〈参考文献〉
鈴木秋彦「野老の伝承―イモ文化の一視点―」森隆男編『民俗儀礼の世界』清文堂・二〇〇二年、野本寛一『栃と餅　食の民俗構造を探る』岩波書店・二〇〇五年

青海庄と加茂ホウ

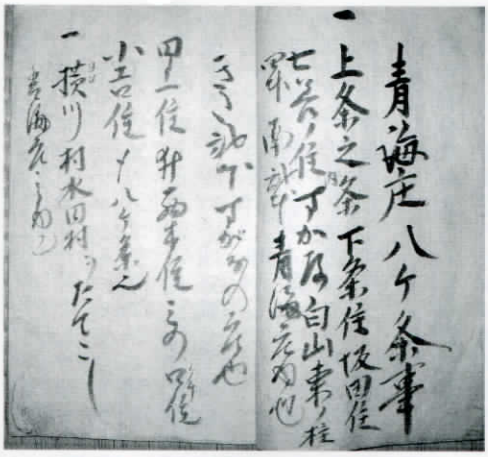
上条の長瀬神社に「青海庄八ケ条事」と題した寛永五年（一六二八）ごろの文書が伝えられています（『加茂市史』資料編2）。

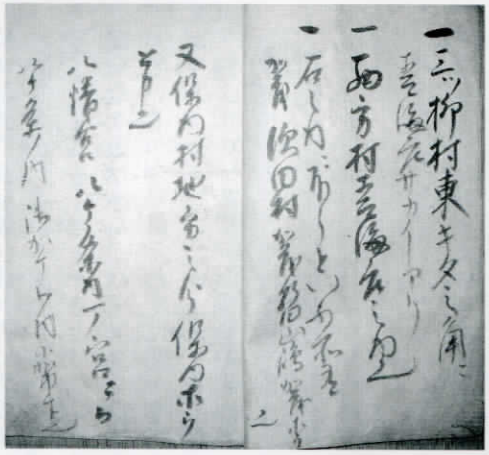
すでに旧版『加茂市史』上巻にも紹介されていますが、本文末尾の三行が欠けていました。そのため、八幡宮（長瀬神社）の神主が本文書を作成した意図が判然としませんでした。全文をみれば、「八幡宮は青海庄八ケ条の内の一の宮である」ことを明記しておく点に主眼があったことは間違いありません。

こうした観点に立って五項目からなる本文書をみると、第一項では当の八幡宮が一の宮たる「青海庄八ケ条」の内訳を、第二項から第四項では「八ケ条」のほかに広がる青海庄の範囲や境界を、第五項では広義には青海庄の範囲にあるが、加茂ホウ（保）や保内ホウ（保）という別称をもつ地があることを指摘する形になっています。

本文書のこうした構成と内容は、中世末期の様相を残像として伝えている可能性があります。貴重な史料だと思います。

（考古・古代・中世部会 桑原正史）





◀▼「青海庄八ケ条事」
（八幡 小池清彦氏所蔵）
六月晦大祓・神書目録などを記した和綴じ冊子に記されている

加茂市史刊行計画

名　称	判型	ページ数（見込）	頒布価格（予定）	備考
資料編1古代・中世	A5判	345	2,500円	既刊
資料編2近　世	A5判	983	3,500円	既刊
資料編3近現代	A5判	1,001	3,500円	既刊
資料編4考　古	B5判	（750）	（3,500円）	
資料編5民　俗	A5判	（930）	（3,500円）	
資料編6文化財	B5判	（750）	（5,000円）	
通史編1	A5判	（800）	（2,500円）	
通史編2	A5判	（800）	（2,500円）	
地域の歴史編	A5判	（800）	（2,500円）	

『加茂市史』資料編 目次より

資料編1古代・中世
青海郷から青海荘へ
古代の青海郷
荘園の世界
戦乱の世
南北朝の動乱
越後の内乱
天下統一と検地
天下統一後の加茂
上条村検地帳
下条村検地帳
猿毛村・神明村検地帳
狭口村・秋房村など
五か村検地帳
賀茂村検地帳

資料編2近　世
領主の支配
加茂地方の町と村
幕藩制の動揺
産業と交通
宗教と文化
幕末の社会変動と加茂地方

資料編3近現代
明治維新と加茂
近代化の進展と加茂
産業と交通の変化
アジア・太平洋戦争下の加茂
戦後民主主義の進展
加茂市の誕生
経済成長の量から質へ